

新学習指導要領における 学習評価の方向

大妻女子大学准教授 かばやまとしろう 樺山敏郎



はじめに

学習評価に関する参考資料には、次のようなものがあります。

- ・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月21日中央教育審議会（以下、答申という。）
- ・「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」平成31年1月21日中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会（以下、報告という。）
- ・「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」平成31年3月29日初等中等教育局長通知（以下、通知という。）
- ・「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」令和2年3月文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター（以下、参考資料という。）

このような資料の内容の要点を整理して、今後の学習評価の方向について解説します。

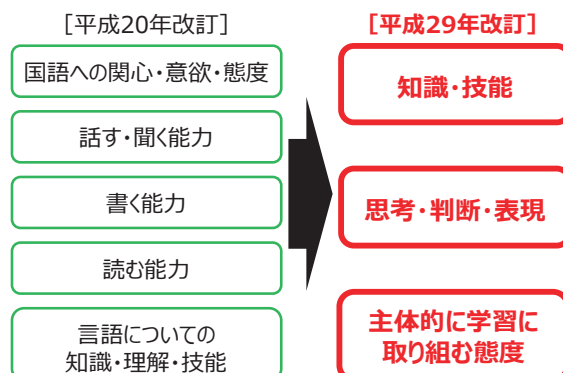
1 学習評価の基本的な考え方

学習指導要領改訂の趣旨を実現するためには、学習評価の在り方が極めて重要であり、学習評価を真に意味のあるものとし、指導と評価の一体化を実現することがますます求められています。報告では、

学習評価の改善の基本的な方向性が次のように示されています。

- ・児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ・教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ・これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

学習評価とは、文字通り、児童生徒の学習を評価するものであり、それは「目標に準拠した評価」を指しています。目標に準拠した評価とは、学習指導要領の各教科等の目標に示された「内容」の実現状況を3観点から評価することを意味します。こうした評価は、「観点別学習状況の評価」と言い換えることができます。観点別学習状況の評価とは、学習状況を観点別に捉え、各教科等における学習状況を分析的に把握することが可能な評価のことを指します。評価の観点は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点となります（図1）。



▲図1

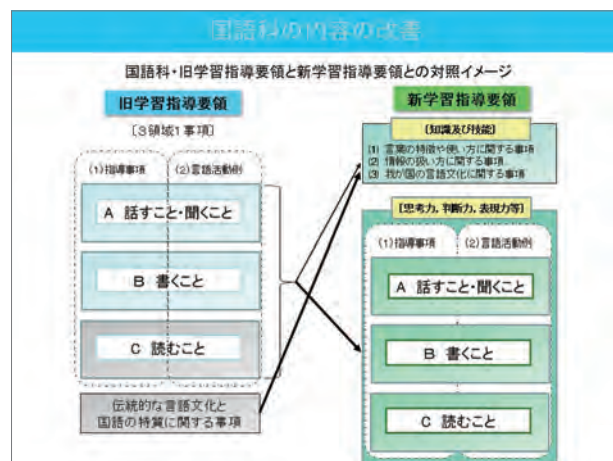
観点別学習状況の評価は、平成 10 年告示の学習指導要領に基づいた平成 13 年の指導要録の改善から導入されました。それまでの学習評価が「集団に準拠した評価（相対評価）」であったものが、いわゆる「絶対評価」としての「目標に準拠した評価（観点別学習状況の評価）」に転換したのです。

相対評価では、集団内での序列をつけるために、評定として「5」は 7%、「4」は 24%、「3」は 38%、「2」は 24%、「1」は 7%というような割合を決めていました。こうした一定の枠組みの中で児童生徒を値踏みするような学習評価からの脱却が求められて、早 20 年以上が経過しています。

学習評価を真に意味のあるものにするためには、一人一人の児童生徒のよさや可能性を尊重し、個を支援するという教師の評価観を問い直す必要があります。それは、「児童生徒にどのような力が身に付いたか（付いていないのか）、何をもってそう判断できるのか、評価を今後どう生かすのか」といった視点をもつということです。児童生徒の学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすることが基本です。そのためには、指導との一体化を図る学習評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性をもったかたちで改善を進めることが求められます。

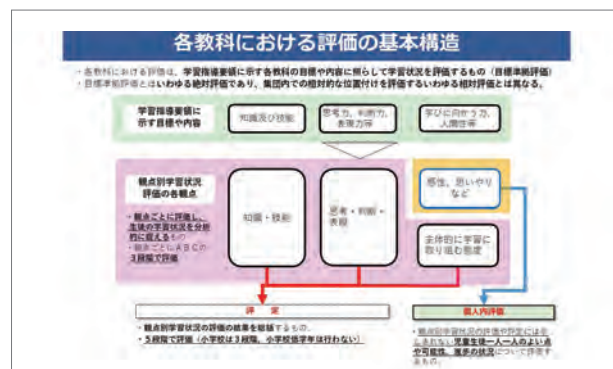
2 国語科における観点別評価の 3 観点

国語科では、平成 29 年告示の学習指導要領に基づく学習評価の観点、平成 20 年版で示されていた活動領域としての 5 観点（「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「言語についての知識・理解・技能」）から、資質・能力として学力の重要な要素に即して 3 観点（前述）に再構成されました。中学校学習指導要領国語（小学校も同様）では、「言語活動を通して」、国語としての資質・能力を育成することとしています。「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の 3 領域は、言語活動を通して指導事項を指導するものとして、〔思考力、判断力、表現力等〕に位置づけられています（図 2）。



▲図 2

通知では、前回までの「関心・意欲・態度」が今回「主体的に学習に取り組む態度」となりました。各教科等においては、「学びに向かう力、人間性等」について、「主体的に学習に取り組む態度」という観点からそれを評価することとしています。それは、なぜか。①「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分と、②観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価を通じて見取部分があるからです（図 3）。「主体的に学習に取り組む態度」の評価とそれに基づく学習や指導の改善を考える際には、生涯にわたり学習する基盤を培う視点をもつことが重要です。



▲図 3

「主体的に学習に取り組む態度」を評価するに当たっては、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動ではなく、児童生徒が「自ら学習の目標を持ち、進め方を見直ししながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりして

いるかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる」とされています。また、答申においても、「このことは現行の『関心・意欲・態度』の観点についても同じ趣旨であるが」、上述のような「誤解が払拭しきれていないのではないか、という問題点が長年指摘され現在に至ることから、『関心・意欲・態度』を改め『主体的に学習に取り組む態度』としたものである」とされています。

具体的な評価に際しては、単に継続的な行動や積極的な発言等を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するというのではなく、各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る評価の観点の趣旨に照らして、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重

要となります。一例として、単元全体で用いる振り返りシートを紹介します（図4）。このシートの特徴としては、単元の目標及び学習活動が明示されていること、目標に合わせて自らの学習を振り返るとともに、その理由を簡潔に記述することが挙げられます。

おわりに

学習評価の充実を図るためには、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うと同時に、評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価することを示し、授業の改善と評価の改善を両輪として行っていくことが重要です。単元や教材における学習評価の具体的な進め方については参考資料の活用をお勧めします。

【振り返りシート】

資料から得た根拠をもとに意見文を書く

1年組 名前（ ）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
比較や分類、関係づけなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使っている。	「書くこと」において、書く内容の中心が明確になるように複数の資料を比較するとともに、段落の役割などを意識して文章の構成や展開を考えている。	粘り強く引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、すすんで情報の整理の仕方について理解し、学習課題にそって共通点や相違点を根拠にしながらかえたことを書くようとしている。

時	学習活動	目標へ迫る工夫 ※どのように目標へ迫ろうとしましたか。
1	「学びナビ」を読んで教材のねらいを理解し、日常生活や自分自身の興味・関心のもとに取り上げる話題と主張したいことを決める。	
2	自分が取り上げた話題について調査した資料を比較して、共通点や相違点を整理する。	
3	第2時に整理した共通点や相違点をもとに、根拠を明確にして文章の構成を考える。	
4	第3時に考えた構成に従って文章を書く。	
5	根拠と主張のつながりに注意して推敲する。	
6	学習者どうしで書いたものを交流し、資料の読み取りや構成の工夫について確認し合う。	

学習を終えて ※目標に合わせて振り返ろう。

知識・技能	
思考・判断・表現	
主体的に学習に取り組む態度	

図 4 ▶



国語科の授業で使えるデジタル教科書の機能を、
具体例とともに紹介していきます！



「国語マーカー」とは？

令和3年度版まなびリンク
特設サイトはこちらから↑↑

「国語マーカー」は、線を引いたマーカーの色ごとに表示／非表示を選択することができる6色のマーカーです。赤色や青色、黄色のマーカーで色分けをしたいとき、普通のマーカーを使うと、ある色に注目するためには他の色を消しゴムで消していかなければなりません。一方、「国語マーカー」を使うと、表示する色を選ぶことができるので、たくさんのマーカーの中から簡単に注目したい色にシぼることができます。



「国語マーカー」の使い方

- ①メニューから「国語マーカー」のアイコンを選ぶ。
- ②どの色の線を引くかを選び、本文に線を引く。
- ③チェックボックスで、どの色を表示／非表示するか選ぶ。

1年『オツベルと象』では、擬声語・擬態語が多く出てきます。それぞれの特徴や使われ方をつかむために、「国語マーカー」で色を分けてわかりやすく整理することができます（画面1）。また、どのような場面で用いられているかを整理することで、それぞれの場面の様子や人物の気持ちが効果的に表現されていることを理解できます（画面2）。



▲画面1 擬声語と擬態語に色を分けて表示。



▲画面2 場面ごとに色を分けて表示。

紙の教科書では何度も書いたり消したりすることに抵抗がありますが、デジタル教科書では書いても消しても紙面を汚す心配はありません。さらに、「国語マーカー」で線を引いた箇所の表示／非表示を切り替えることで、注目したい色に絞ってマーカーの線を残すことができます。

「国語マーカー」の使い方はアイデア次第で無限大です。デジタル教科書の紙面上の文章を視覚的にわかりやすく整理することで、子どもたちの学びがより活発で有意義なものになることが期待できます。

次号（2月発行予定）に続く。

中学国語通信 みちしるべ Vol.1 2021（令和3）年12月発行

教育出版株式会社 編集局 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館

TEL：03-5579-6278（代表）

本資料は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」にのっとり、配布を許可されているものです。